The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パターンによる流行受容 : 初期『ハーパース・バザー』の重要性
Author(s)	平芳, 裕子
Citation	デザイン理論. 2016, 68, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57968
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パターンによる流行受容
── 初期『ハーパース・バザー』の重要性

平　芳　裕　子

キーワード
ファッション，型紙，ハーパース・バザー，ウォルト，アメリカ
Fashion, Paper patterns, Harper's Bazar, Worth, America

１．はじめに
２．女性誌からファッション誌へ
３．ファッション誌のパターン
４．パターンによるパリ・オートクチュールの受容
５．おわりにかえて

１．はじめに

『ハーパース・バザー（Harper's Bazar)』はアメリカの代表的なファッション誌である。1867年にハーパー兄弟によって創刊され，アメリカ最初かつ最長の出版期間を誇るファッション誌でもある[1]。にもかかわらず，ファッション研究における『ハーパース・バザー』は，1892年に登場した『ヴォーグ』の華々しい活躍の陰に隠れているように思われる。『ハーパース・バザー』の黄金期と見なされる20世紀前半は，名物編集者であったダイアナ・ヴリーランドが有名写真家を起用し，同誌を洗練されたファッション誌に成長させた時代である。だが彼女はその後『ヴォーグ』編集長となり『ヴォーグ』を最先端のファッション誌へ導いた[2]。そのため，『ハーパース・バザー』はアメリカ初のファッション誌でありながら，後続の『ヴォーグ』の比較対象と見られることが少くない。ことに『ヴォーグ』創刊前の時代，すなわち19世紀後半の『ハーパース・バザー』が学的関心の対象となるとすれば，ヴィクトリア朝時代アメリカの服飾様式や衣服産業の歴史を再構成するための視覚的資料としてであった[3]。ここで本論がこの時代に注目するのは，同誌が取り上げたファッションスタイルの新規性を追認するためではない。それどころか，ベルリンの『デア・バザー（Der Bazar)』から流行情報の提供を受けて創刊された「ハーパー兄弟のバザー」は，ヨーロッパ誌の模倣という側面を持つ[4]。本論が『ハーパース・バザー』の初期にあえて着目するのは，アメリカが物質的繁栄を迎えた19世紀後半の同誌を通して，ファッション誌におけるパターンの役割という従来には看過されてきた問題を考察することができると考えるからである。

本稿は第224回研究例会（2015年11月21日，於：京都市立芸術大学）での発表に基づく

『ハーパース・バザー』は「ファッション誌」として創刊されたにもかかわらず，従来の女性誌と同様に「パターン」を付録や通販で扱った。そのため女性誌的要素を多分に残した初期の『ハーパース・バザー』は，後世の研究では「ファッション誌」としてはさほど注目されない。だが，19世紀の女性誌からファッション誌への移行の時代において，家庭内労働としての衣服制作から商品購買によるファッション消費への移行がいかに行われたのか，そのプロセスを辿ることができる。そこで本論では，『ハーパース・バザー』の初期，とりわけ創刊の1867年から1880年代初頭までを対象として，この雑誌が掲載した特集記事，イラストレーション，広告，付録のパターン（型紙）などを一つの総体として捉え，次の観点から雑誌の表象にアプローチする。すなわち，家庭内労働としての衣服制作と消費の対象であるファッションはいかにして結びつくのか，そしてファッション誌におけるパターンとはどのようなものだったのか，またパリのオートクチュールはアメリカのファッション誌にいつどのように伝えられたのか，という点である。以上の点から雑誌の表象を読み解いていくことによって，初期『ハーパース・バザー』の特質とともに，ファッション誌においてパターンが果たした役割について明らかにしたい。

２．女性誌からファッション誌へ

アメリカ初のファッション誌とみなされる『ハーパース・バザー』であるが，創刊当時の出版状況についてまず確認しておきたい。それまで「ファッション」を話題にする雑誌といえば女性誌であった。『ゴーディズ・レディズ・ブック』[5]や『ピーターソンズ・マガジン』[6]といった女性誌が，家庭生活を営む女性たちの関心事を取り上げるとともに，流行の装いを図示したファッション・プレートを掲載した。だが19世紀前半から半ばにかけて人気を博したこれらの女性誌は，19世紀後半になると編集方針も特集記事も形骸化し，新鮮味を欠いていく。また新たな女性誌『レディズ・ホーム・ジャーナル』[7]が創刊されたのは1883年である。つまり，ちょうど主力女性誌不在の時代に登場したのが『ハーパース・バザー』であった。同誌は，『ハーパース・ウィークリー』と『ハーパース・マガジン』の二紙により成功を手にした出版者ハーパー兄弟が，女性をターゲットとして「ファッション」を中心的テーマに据えて創刊した雑誌である（図１）[8]。副題に「ファッション，悦びと教えの宝庫」と添えられるように，ファッションに関わる様々な楽しみを読者に提供することを目的とした。それまで，女性誌で

図１　1867年11月２日号表紙

「ファッション」が取り上げられる際には，「ファッション」は女性の知性や道徳の向上に資するものでなければならなかった。しかしながら19世紀後半に登場した『ハーパース・バザー』にはそのような口実はもはや必要なかった。その理由には時代背景が深く関わる。

『ハーパース・バザー』が創刊された1867年は，アメリカの新しい時代の幕開けとも言える。南北戦争が終わり，技術革新のもとに手工業が栄え，様々な商品が生産され都市経済が発展し，中流階級が物質的恩恵に浴する時代である。その影響は誌面にも明らかだ。それまでの女性誌ではほとんど見られなかった広告が，雑誌の巻末に三，四ページに渡り所狭しと並んでいる[9]。家庭生活を豊かで便利なものにするための商品，たとえば家具や楽器，銀器やジュエリーや時計，脱水機や洗濯機などの広告が頻繁に掲載された[10]。広告主は出版元であるニューヨークの商店が多かったが，西部への流通の要となるシカゴの商店も登場し，アメリカ全土へ広がる商品経済の発展の様子が伺える[11]。そして誌面には，物質的繁栄を享受する人々を揶揄する風刺画まで掲載された。「我らが崇拝するもの」と題された版画に描かれているのは，巨大なドル紙幣のもとに積み上げられた様々な商品 —— 船の模型や肖像画，ジュエリーボックスに入ったネックレスやクリノリンにパラソル，シルクハットに紳士用スーツ，タバコの箱 —— を前にして跪き祈りを捧げる人々である[12]。だが『ハーパース・バザー』は物神崇拝を社会悪として非難するというよりむしろ，自戒を込めつつも消費社会の到来を謳歌しているようである。魅力溢れる新商品を宣伝し，流行のファッションを紹介したのは，ほかならぬ『ハーパース・バザー』自体であったからだ。『ハーパース・バザー』は従来の女性誌とは異なり，表紙から最新ファッションをアピールした。

1867年の創刊号を見てみよう[13]。表紙にウェディングドレスの女性が二人描かれている。しかし『ハーパース・バザー』が掲載したイラストレーションは必ずしもオリジナルではなかった。この図版も実のところ，『デア・バザー』の同年９月号に掲載された図版と同じものである[14]。かつて女性誌としてファッションを積極的に特集し，ヨーロッパ誌に対抗してオリジナルのファッション・プレートを制作した『ゴーディズ・レディズ・ブック』の努力を思い起こすならば，『ハーパース・バザー』のファッションに対する姿勢は異なる。『ハーパース・バザー』にとって重要であったのは，ヨーロッパの人々と同じ流行情報を迅速に提供することであった[15]。アメリカの独自性よりもむしろ，パリを中心とするヨーロッパの流行の文化圏にアメリカを位置付けることが重視された。『ハーパース・バザー』の定番の特集は「ニューヨーク・ファッション」であったが，それもニューヨーク現地のファッションというよりも，ニューヨークに届いたパリの最新流行を報じるものであった。記事には「一流のドレスメーカーがパリから戻り，パリの最新デザインをオープニングで紹介しました」[16]「レイモンド夫人の通信には格子柄より縞柄の方が流行っているとありましたが，パリからちょうど戻ってき

たバイヤーたちによればその通りだということです」[17] と，パリに関する情報が記された。しかしここで留意しなければならないのは，『ハーパース・バザー』は最新流行を伝える「ファッション誌」であっただけではなく，それまでの女性誌の定番特集であった手仕事に関する記事も得意としたということだ。

初期の『ハーパース・バザー』には，『ゴーディズ・レディズ・ブック』や『デア・バザー』と同様に，手芸品のモチーフとその作り方が掲載されている。だが『ハーパース・バザー』の読者は女性誌全盛の時代に生きていたわけではない。ある記事によれば，読者の祖母の世代には，糸を紡ぎ，旅回り職人に布を織らせ，針仕事にも多様な技術が要求されたという。だが「機械が世界を変えた」[18]。技術革新によって生じた余暇の時間に，新たな取組みをするよう記事は奨励している。具体的には，パターン（型紙）を利用して服作りをすることだ。パターンとは服を作るための布の裁断の仕方を示したガイドである。裁縫は当時においてもなお女性の重要な仕事であったが，布地の裁断にはより専門的な知識や技術が必要であり，器用な友人やドレスメーカーを頼りとする女性も多かった。そこでパターンを雑誌の付録に付け，あるいは通信販売で扱ったのが『ハーパース・バザー』であったのだ。パターンの実用化が始まる19世紀半ば，女性誌においても誌面でパターンの縮図が掲載されたり，実物大のパターンが付録として添付されたり，パターンを扱うドレスメーカーの広告が掲載された事例は見られる[19]。しかしながら『ハーパース・バザー』の新しさは，最新流行のファッションを表紙や誌面で紹介し，それを実際に作るためのパターンを付録や通販で扱ったことにある。つまり，最新のファッションとそれを作るためのパターンをセットにした「ファッション誌」であったのだ[20]。

３．ファッション誌のパターン

では実際に『ハーパース・バザー』のパターンを見てみよう（図２）。現存するものは数少ないが，図は1867年のパターンである[21]。薄紙の上にたくさんの線が引かれているが，両面それぞれに約25ものパターンが重ねて印刷されている。紙の左端にはパターンとして掲載されている服の名称が書かれており，服を作るために必要な図の番号，パターンの取り扱い方が説明されている。それぞれのパターンを区別するために，線は実線や点線など様々な種類で描き分けられている。しかしパターンをそのまま切り抜いて使用することはできない。なぜなら複数のパターンが重ねて印刷されているため，目当てのパターンを他の紙に写し取るか，ルレットでパターンを布に転写する必要がある。雑誌の巻末にも毎号のようにルレットの広告が掲載されている。広告文には「付録から容易くパターンをとる」ためのルレットは「様々なパターンからも，服そのものからパターンをとるときにも，非常に便利です」とある[22]。しかしル

レットで線をトレースすると薄紙に穴が開くためにパターンの再利用は難しくなる。また，たとえパターンを写し取ることができたとしても，それを読み取って仕立てるには相当の知識と技術が必要であったと考えられる。そこで，『ハーパース・バザー』は初期から服作りをテーマにした記事を掲載し，パターンの扱い方を誌面で教示した。

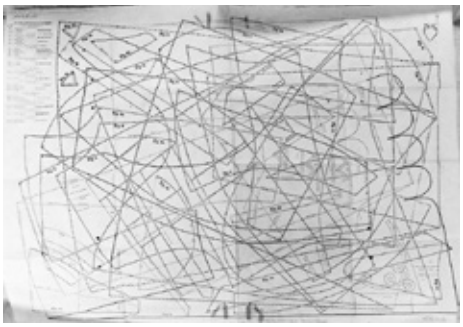

図２　1867年第１号のパターン（筆者撮影）。Courtesy of the Commercial Pattern Archive, Special Collections, University of Rhode Island.

1869年の「衣服制作」と題する記事は「通常の技量があれば誰にでも役立つ服作りのためのガイド」であった[23]。記事には，パターンを用いて服作りをするための具体的な手順が説明されている。とりわけ詳述されているのは，体の測定方法である。「最も重要なのは採寸です。パターンをよくフィットさせるために，とても正確に行わなくてはなりません」と書かれている。さらに「『バザー』が掲載してきたパターンは一つの型でしかありませんから，どなたにでも合うというわけではありません。これらのパターンを読者の皆様が利用できるように次の手順で採寸をします」とある。図版には，シンプルなドレスを纏った女性の上半身が描かれ，胸部，ウエスト，背中などの複数の箇所に目盛り付きのテープが巻かれている（図３）。テープの寸法をパターンに当てはめ拡大もしくは縮小すればよいというわけだ。パターンの用い方の説明として，この記事は非常に有用だったようだ。なぜなら，同時代の雑誌『デモレスト・マンスリー』がこの記事を盗用した，と『ハーパース・バザー』はある記事のなかで告発しているからである[24]。『デモレスト・マンスリー』[25] はニューヨークの服飾雑貨店が出版した雑誌である。同誌は服飾雑貨店の販売促進を目的として，服作りの手法を紹介したり，ファッション・プレートを掲載したり，取次店の紹介や商品の宣伝を行った。だがファッション情報の多様性と質は，雑誌の出版が主目的である『ハーパース・バザー』には及ばない。パターンも扱う服飾雑貨店にとって，『ハーパース・バザー』の記事は商品説明として誠に都合の良い記事であったのだろう。

図３　1869年９月４日号より

このように，服飾雑貨店からも注視された『ハーパース・バザー』であったが，実際のところそのパターンはどれほどの需要があったのだろうか。残念ながら実証的資料は乏しい。先にも述べたように，雑誌本体が現存していても付録の多くは欠損している。だがその事実は翻って，パターンが実際に利用され，

使い尽くされ，廃棄された可能性を示唆していると言えなくもない。一方，通販のパターンや販売記録も残されていない。しかし『ハーパース・バザー』の巻末の広告欄には，同誌によるパターンの広告も掲載されており，多少の手がかりが得られる。広告によれば，『ハーパース・バザー』のペーパーパターンは，胸囲30インチから46インチまでにサイズ分けされており，パターンにはそれぞれを組み合わせるための服の名称や指示書きが印刷された。またパターンは１セット９パターンが２ドルの価格で，送料は25セントであった[26]。広告には「トレーン付きのイヴニングドレス」「ポーランド風の散歩用スーツ」など，実際に販売されたスタイルの名称が掲載されている。しかも号を経るごとに，古くから発売されていたパターンは記載がなくなっていく。つまりパターンは順調に売れていたようだ。また，雑誌に掲載された通信欄も，パターンに対する読者の反応を知る手がかりとなる。編集部には読者からの手紙が届いたが，通信欄には読者の質問に対する回答が記されている。例えば「私たちの雑誌からもちろんパターンを写すことができます」[27] という回答や，あるいは「子供用の短い産着のペーパーパターンは扱っていませんが，イラストレーションとパターンの載った付録ならばお送りすることができます」[28] という回答からは，読者が『ハーパース・バザー』に様々なパターンを期待していたことがわかる。

また『ハーパース・バザー』と読者の関わりは，1871年に掲載された版画にも示されている。「パターンを探して」と名付けられた作品に，家庭内の女性たちの様子が描かれている（図４）[29]。ゆったりとした椅子に腰掛け，大きく広げた誌面を眺める老婦人の周りを，娘や孫と思しき家族が集う。彼女たちの視線は，老婦人の手元の『ハーパース・バザー』に注がれている。解説には，「この絵をご覧いただくのに説明は不要でしょう。毎週私たちが訪問するご家庭ではお馴染みの光景です。お年寄りから子供まで，ご家族の全ての方が『バザー』にお気に入りのものを求めています。そしてがっかりなさるなどということは断じてございません」[30] とある。ではパターンはこの絵のどこに描かれているのだろう。老婦人の足元に一枚の紙が落ちているようだ。曲線と直線が重なるように描かれた紙，それこそがパターンである。

図４　1871年５月27日号より

雑誌という媒体におけるパターンの登場は，それまで専門的な技能を要した布地の裁断を家庭内で遂行可能なものへと変えた。それは裁断に伴う困難な作業を軽減し，家庭での衣服制作を推進したと言える。だがそれだけではない。版画に描かれた家族が，お気に入りのスタイルを雑誌の中に探していたように，ひとたび作るべき服が決まれば，パターンを手

にいれる必要が生じる。パターン登場以前には，女性たちは知人とドレスを貸し借りしながら実物の服からパターンを取っていた。だがパターンの登場により，読者はパターンを目当てに雑誌を購入するか，新たに通販のパターンを申し込むこととなる。そして雑誌の巻末の広告に掲載された様々な材料や裁縫道具の購入を考えただろう。すなわち，家庭内の女性の伝統的な仕事に，新たな消費行動が加わった。それも，商品化されたパターンにより，女性は裁縫という伝統的振舞いを通じて，家庭のなかに居ながらにして消費社会へ確実に取り込まれて行ったのだ。

４．パターンによるパリ・オートクチュールの受容

これまで見たように，『ハーパース・バザー』のパターンは付録として付けられるものもあれば，通販で販売されるものもあった。『ハーパース・バザー』は最新流行をイラストで紹介したが，服作りのためのモデルを選ぶいわばカタログ的な存在であったわけだ。19世紀後半の商品経済の発展の時代に，『ハーパース・バザー』は家庭裁縫と流行文化を結びつけるメディアの役割を果たした。しかし『ハーパース・バザー』の初期の特徴はそれだけではない。19世紀後半はパリに新しい服飾産業が誕生した時期である。つまり『ハーパース・バザー』はちょうどパリで発展しつつあったオートクチュール（高級仕立服）を誌面で紹介したファッション誌であったのだ。それでは初期の『ハーパース・バザー』がパリのオートクチュールをいかに誌面で扱ったのかを見ていきたい。

オートクチュールの創始者とされるシャルル・フレデリック・ウォルト（Charles Fredrick Worth）[31] の名が初めて『ハーパース・バザー』に掲載されたのは，1870年代始めであった。ウォルトはそれまでの顧客主導型の仕立服の制作方法を改め，あらかじめデザインを考案し，提示したモデルのなかから顧客に選択・注文させるオートクチュールのシステムを考案したとされる。パリにウォルトが開店したのは1858年であるから，それからしばらくのちに『ハーパース・バザー』に掲載されたということになる。興味深いのは登場の仕方である。それまでの女性誌では，パリのファッションといえば，ファッション・プレートで美しく彩色された装いが描かれたものだ。だが『ハーパース・バザー』に初めて登場したウォルトのドレスは，注意しなければ見過ごしてしまいそうな記事の中にあった。ウォルトのドレスは1871年の１月７日号の４ページ目の記事に，”Worth Basque House Dress” と紹介されている（図５）[32]。ハート型の胸元の形をしたバスクと，短いエプロンと五段のひだ飾りがついたスカートが特徴的なスタイルである。またバスクとスカートは明るいモーヴ色で黒いレースがあしらわれ，引き裾はモーヴ色のシルクであるという。ところがさらに説明を読み進めると，ただウォルトのオートクチュールを紹介しているのではないことがわかる。記事には，バスト寸法と25セン

トの送料を添えて郵送で申し込むとドレス一式のパターンが入手可能であると添えられている。つまり，ウォルトのオートクチュールそのものではなく，オートクチュールのドレスに倣ったパターンを記事は紹介しているのである。ではこのパターンはどれほどの人気があったのだろうか。残念ながら実物のパターンは見つかっていないが，巻末の広告がやはり手がかりとなる。1871年４月８日号（p. 223）の広告欄には商品名（”Worth-Basque House Dress”）が掲載されているが，1874年５月号の広告欄には記載がない。つまり最初に一定量生産されたパターンが，この間に完売したと推測される。また読者への通信欄には，読者から寄せられた質問に対してウォルトの同パターンを勧める回答も見られ，それなりの需要があったと見られる[33]。そして1874年12月号において，ついに『ハーパース・バザー』の表紙に「ウォルト」の名が掲載される。

図５　1871年１月７日号より

図６　1874年12月19日号

1874年の表紙を見てみよう。優雅な室内で向かい合う女性たちが描かれており，キャプションには“Worth Basque and Full-Trained Trimmed Skirt”と記されている（図６）。ところが説明によると，やはりこのスタイルもウォルトのオートクチュールそのものではないことが判明する。「この優雅な家庭用，ディナー用，訪問用，イヴニング用のドレスは，有名なパリのドレスメーカーであるウォルトの洗練された衣装に倣う（copy）ものです」と記されており，のちに百貨店として有名になった「ロード＆テイラー社のご厚意による提供」とある[34]。そして「オリジナルのドレスは黒の絹地で，イラストに見られるようにベルベットやシルク，フリンジがふんだんに施されて」いるというのだ。イラストの下にはやはりパターンの案内が添えられ，25セントの前払いで，胸囲に基づき９つのサイズのパターンが通販で入手可能とある。果たしてロード＆テイラーがオリジナルのオートクチュールを輸入してアメリカでの販売権を獲得したのか，ウォルトがアメリカに向けた普及版モデルを自身で用意したのか詳細は不明である[35]。だが1870年代前半のウォルトには類似したドレスが少なくとも二着現存しており，そういったオートクチュールのドレスがアメリカ普及版のモデルとしての役割も果たしたと推察される（図７）[36]。さらにもう一点「ウォルトのマントル」（Worth mantle）」も見ておこう（図８）[37]。1882年の表紙に紹介され

たマントルは，袖や裾にたくさんつけられた長めのフリンジ飾りに特徴がある。そして，このマントルには幸い，付録のパターンの実物が現存する。（図９）実際にパターンを見てみると，他の付録と同様に表面にはいくつものパターンが重ねて印刷されているが，なかに「ウォルトのマントル」のパターンがFig. 15からFig. 17まで３点含まれている[38]。さらに興味深いことに，このパターンには，類似する同時代のオートクチュールが現存する。裾の形は異なるものの，スタンドカラーであることや後ろ身頃の細長いパネル，また木のビーズによるボリュームのある裾飾りがよく似ており，パターンのモデルともなりえたデザインと推察される（図10）[39]。

図７　ウォルト 1874年頃 ©京都服飾文化研究財団

このように，『ハーパース・バザー』は1870年代の初頭から，パリのオートクチュールのファッションをパターンを通じて伝えていた。しかしながらもちろん，アメリカ女性の全てがパターンを頼りとしていたわけではない。当時の東部アメリカ社交界の様子を描いた小説『無垢の時代』にはウォルトにドレスのお直しを頼む婦人の姿が描写されているが，『ハーパース・バザー』の社交欄においても「ウォルト」の名はたびたび報じられている[40]。例えば，エドモンド・ド・ロスチャイルド氏とそのいとこの結婚式では，ウォルトが直々にドレス一式を用意したこと[41]，またウェント新夫人のウェディングドレスは，ケンジントン王室美術学校で制作された刺繍の施されたウォルトのドレスであったこと，などだ。1870年代後半以降にはアメリカの上流階級がウォルトを贔屓にしていた様子がこれらの記事からうかがえる[42]。だが，パリに出向いてオートクチュール店で直接注文するほどの経済的余裕がない女性であったとしても，『ハーパース・バザー』のパターンを利用すれば，同様の色や素材の生地でドレスを縫ったり，あるいは地元のドレスメーカーに注文したりす

図８　1882年３月４日号表紙より

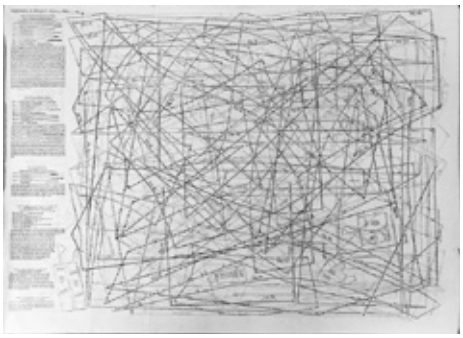

図９　1882年第９号のパターン（筆者撮影）。Courtesy of the Commercial Pattern Archive, Special Collections, University of Rhode Island.

ることができた。パターンに倣うことで，オートクチュールの流行を取り入れることができたのだ。そして読者たちが取り入れたオートクチュールはウォルトに止まらなかった。同時代に活躍したパンガのファッションも，1876年４月29日号の表紙に“Corset Basque”として掲載され，パターンが紹介された[43]。アメリカの女性たちにとって，パリのオートクチュールはパターンを通じて入手可能なものであり，それはまさしく流行のモデルとして存在したのである[44]。

図10　ウォルト 1880年代 ©
京都服飾文化研究財団

５．おわりにかえて

これまで見てきたように，『ハーパース・バザー』は最新流行を伝えながら，服作りのためのパターンを扱った。さらにパターンを普及させただけではなく，パリのオートクチュールに倣うスタイルのパターンも紹介した。すなわち『ハーパース・バザー』はパターン付きのファッション誌であったが，とりわけパリのオートクチュールを模したパターンを付けた先駆的ファッション誌であったのだ。再びパターンの役割について考えてみよう。『ハーパース・バザー』のパターンに見られるように，商品化されたパターンが家庭内における衣服制作で徐々に利用されるようになる。同時に，女性たちは裁縫という伝統的な振舞いを通して，近代的消費社会における経済活動に参入していくこととなる。だがパターンはただ家庭裁縫の作業を合理化し，商品経済を活性化させただけではなかった。女性たちは『ハーパース・バザー』にお気に入りのファッションを探し，それを作るためのパターンを写し，「型通り」に布地を裁つ。つまりパターンの利用によって，女性たちは「モデルに倣う」習慣をも身につけることになる。そしてそれは「流行に倣う」という振舞いを自ら身体化させていくプロセスでもある。このプロセスに組み込まれたのがパリのオートクチュールであったのだ。

従来のファッション史で言われるように，パリのオートクチュールは確かにアメリカのファッションに影響を与えたが，1870年代前後の『ハーパース・バザー』の記事を精査するかぎり，より正確には，パターンによる家庭裁縫が強力に推進されたアメリカに，パリのオートクチュールもまた理想的なモデルとして取り入れられた，と言えるだろう。初めてウォルトが『ハーパース・バザー』に紹介されたとき，このパリのオートクチュール店はその有名性をことさら強調されることもなく，他の（アメリカのファッション）スタイルと同様に一つのパターンとして紹介された。そして以後，オートクチュールのファッションは，『ハーパース・バザー』のパターンを通して，広くアメリカ女性に知られることとなる。『ハーパース・バザー』は，パターン付きのファッション誌として，19世紀後半のアメリカにおける流行受容に大きな役割を果たしたのである。

そして1880年代に入ると，『ハーパース・バザー』の他にも女性向けの新たな雑誌が登場する。1883年に創刊された女性誌『レディズ・ホーム・ジャーナル』は，20世紀に入りパターンの通販を開始する[45]。また1892年に創刊されたファッション誌『ヴォーグ』は，1899年にパターンの扱いを誌面で開始した。なかにはオートクチュール店パキャンの名も見られる[46]。つまり1867年に創刊された『ハーパース・バザー』のスタイルは，続くアメリカの女性誌・ファッション誌が追随するところのものとなる。来たるべき20世紀，女性たちは（男性に比して）パリの流行受容の中心的存在となるが，それは『ハーパース・バザー』をはじめとするパターンを通して，「流行に倣う」という振舞いをすでに獲得していたからだと言えよう。

謝　辞

本論執筆のための資料調査と図版掲載にあたり，ロードアイランド大学付属図書館コマーシャル・パターン・アーカイヴのジョイ・エメリー（Joy Emery）氏，また京都服飾文化研究財団の石関亮氏・新居理絵氏にご高配を賜りました。ここに記し感謝の意を表します。

付　記

本論は科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題「メディア表象に見る『アメリカン・ファッション』の生成過程研究」の成果の一部として公開するものである。

註

1　『ハーパース・バザー』の出版・編集に関する基本的情報はFrank Ruther Mott, *A History of American Magazine Volume III 1865–1885,* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1957, Kathleen L. Endres and Therese L. Lueck（ed.）*Women's Periodicals in the United States,* Connecticut: Greenwood Press, 1996を参照。

2　ヴリーランドはのちにメトロポリタン美術館衣装部門の特別顧問としてファッション展の開催に尽力した。以下を参照。Eleanor Dwight, *Diana Vreeland*, New York: Harper Collins Publisher, 2002, Lisa Immordino Vreeland, *Diana Vreeland: The Eye has to Travel*, New York: Abrams, 2011.

3　アメリカのファッション誌の歴史における『ハーパース・バザー』の位置づけと形式的特徴の分析に関してはPhyllis G. Tortora, *The Evolution of the American Fashion Magazine as Exemplified in Selected Fashion Journal 1830–1869*, Ph. D. Dissertation, New York University, 1973に詳しい。また，『ハーパース・バザー』掲載のファッション・プレートを通じた服飾様式の研究に関しては，Stella Blum, *Victorian Fashion and Costume From Harper's Bazar 1867–1898*, New York: Dover Publicaions, 1974, 商業パターンの歴史における『ハーパース・バザー』の位置付けに関してはJoy Spanabel Emely, *A History of Paper Pattern Industry*, London: Bloomsbury, 2014を参照。

4　*Der Bazar: Illustrirte Damen-Zeitung*, Berlin: Bazar-A. G., 1855–1937. 後述するように，ヨーロッパと同じ流行情報を扱うことが雑誌のステータスとなった。その後，*Harper's Bazar* は *Der Bazar* との

差別化のために，1929年にタイトルを英語風の表記 *Harper's Bazaar* に変更するのである。

5　*Godey's Lady's Book*, 1830–1898. 同誌については次の拙論を参照。「フィラデルフィア・ファッション ──『レディズ・ブック』における良き女性の表象」『服飾美学』第47号，pp. 55–72.「「正統なるファッション」とは ──『ゴーディズ・レディズ・ブック』のファッション・プレートをめぐる言説」『美学』第60巻２号，pp. 84–97.

6　*Peterson's Magazine*, 1842–1898. 1842年に Charles J. Peterson により創刊。

7　*Ladies' Home Journal,* 1883〜. Cyrus H. K. Curtis により創刊。

8　*Harper's Weekly* や *Harper's Magazine* と同じく *Harper's Bazar* も年間講読料４ドルであった。

9　それまでの女性誌において広告が全く掲載されなかったわけではない。例えば，*Godey's Lady's Book* では1860年代半ばから広告が掲載され始めるが，広告自体が稀であった。掲載されたとしても１ページに掲載される商店は一つ二つといったシンプルなものであった。それに対し，*Harper's Bazar* は１ページのなかに多数の商店の名前，多数の商品の情報やイラストを掲載し，しかも巻末の数ページに渡って掲載したのである。

10　例えば WARREN WARD 店の家具（1869年12月４日号，p. 783）や STEINWAY & SONS の楽器（1872年１月13日号 p. 30）の広告を参照。なお，以下の註では *Harper's Bazar* からの引用の場合には雑誌名を省略する。

11　以下の D. B. Fisk 店の広告を参照。1871年３月25日号，p. 190，1873年４月19日号，p. 254.

12　"What We Worship," 1869年７月３日号，p. 425.

13　1867年11月２日号表紙。

14　*Der Bazar,* 1867年９月号表紙。『ハーパース・バザー』の表紙には，『デア・バザー』に掲載されたウェディングドレスの図版に加え，さらに四種類のボンネットの図版も掲載されており，イラストレーションが強調された誌面構成となっている。

15　1867年11月30日号（p. 79）の広告欄では，パリの有名紙にファッションを提供するベルリンの "Der Bazar" と提携することで，ヨーロッパに遅れをとらずにアメリカにファッションを伝えることができると述べられている。

16　"New York Fashions," 1875年５月１日号，p. 283.

17　"New York Fashions," 1875年９月18日号，p. 603.

18　"Fashionable Employment," 1872年１月20日号表紙。

19　『ゴーディズ・レディズ・ブック』の掲載したパターンの縮図については次の拙論を参照。「女工，お針子，家庭裁縫 ── 19世紀アメリカのファッション文化における女性」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第７巻１号，pp. 43–50. また19世紀半ばのアメリカ女性誌のパターンについてはジョイ・エメリーの前掲書を参照。

20　世界的に見るならば『ハーパース・バザー』はパターンを付録に付けた最初の雑誌ではなく，フランスでは19世紀前半から "La Toilette de Paris" などの先例がある。しかしパターン産業・雑誌ともに発展を見たのはアメリカであり，『ハーパース・バザー』はその発展に大きく寄与したと言える。

21 ロードアイランド大学付属図書館コマーシャル・パターン・アーカイヴには雑誌付録・通販のパターンが所蔵されるが，今回実見調査を行うことができたのは付録のパターンのみであった。

22 例えば1871年１月14日号，p. 30参照。

23 “Dress-Making,” 1869年９月４日号，pp. 564–565.

24 “Journalistic Assumption,” 1870年１月１日号，p. 2.

25 デモレストは1860年に季刊誌 *Mirror of Fashion* を出版し，1864年に *Demorest's Illustrated Monthly and Mme Demorest's Mirror of Fashions* へタイトルを変更する。当時の女性誌人気を意識してか，誌面には物語や版画も多く，また彩色ファッション・プレートにも力を入れていた。なお，デモレスト専門店のパターンは１セット15パターンで５ドル，小セット８パターンを３ドルで販売していた。（同誌1865年４月号の広告欄を参照。）同誌については雑誌原本の他，以下を参照。Mott, op.cit., 324–328, Endres and Lueck, op.cit., pp. 67–74. Ishbel Ross, *The Crusade and Crinolines*, New York: Harper & Row, 1963. 濱田雅子「アメリカ女子服のパターン・システムに関する一考察 ── デモレスト・パターンとバタリック・パターンを中心に ──」『国際服飾学会誌』24号，pp. 41–62.

26 1874年５月２日号，p. 295. 付録でパターンがつけられた場合は無料であった。他誌のパターンの価格については次に詳しい。Emery, op.cit., pp. 55–69.

27 “Answers to Correspondents,” 1873年12月６日号，p. 782.

28 “Answers to Correspondents,” 1873年４月26日号，p. 263.

29 1871年５月27日号，p. 329.

30 “Looking for a pattern,” 1871年５月27日号，p. 327.

31 イギリス人デザイナーであるが，本論では服飾史慣例に倣い仏語発音表記に統一する。

32 ウォルトの生涯とデザイン活動を総括したダイアナ・ド・マルリーも，またアメリカのオートクチュール受容について論じたブルックリン美術館展覧会カタログも，『ハーパース・バザー』における最初期の事例として1874年の表紙（図６参照）挙げるが，本論で明らかにするように，1871年の記事が最初のものである。Diana de Marly, “Worth, Father of Haute Couture,” New York, London: Holmes & Meier, 1980, p. 143. Elizabeth Ann Coleman, *The Opulent Era, Fashion of Worth Doucet and Pingat*, The Brooklyn Museum, 1989, pp. 36–37.

33 “Answers to Correspondentes,” 1875年１月23日，p. 70. また1870年代前半には「ニューヨークファッション」の記事内でしばしばウォルトのスタイルが報道されるようになる。

34 1874年12月19日号，p. 830.

35 のちの1880年代には *The Queen* や *The Ladies' Treasury* もウォルトを掲載したが，パターンの取扱いと複製の権利についてはいまだ不明な点が多い。Op. cit., Coleman, pp. 41–42.

36 1874年表紙のドレス（図６）のデザインに類似するウォルトのオートクチュールには他にも，メトロポリタン美術館所蔵品のドレス（所蔵番号46.25.1）が現存する。（op.cit., Coleman, p. 37.） 京都服飾文化研究財団所蔵（図７）のドレスのデザインは，前面のエプロンやフラウンスの飾りから，むしろ1871年掲載記事（図５）のドレスのデザインに近似すると見られる。ちなみにブルックリン美術館所

蔵の紫色のアフタヌーンドレス（1872年頃・所蔵番号33.74）も類似のデザインと見られる。

37　1882年３月４日号表紙。

38　マントルのパターンの詳細は次の通りである。パターンはFig. 15の前身頃，Fig. 16の後ろ身頃，Fig. 17の袖の計３点が掲載されている。薄紙に多数印刷されたパターンの中から識別するために，これらのパターンの線はFig. 15が二重線と黒丸，Fig. 16が実線とバツ印，Fig. 17が二重線と四角の組み合わせで印刷されている。しかしこれらの線をただ写し取れば良いというわけではない。Ａ１の大きさの紙のなかに全てのパターンを収めるために，パターンはところどころ折りたたまれた形で印刷されている。そのため，折り返し線でパターンを開いて形を取る必要がある。点線で示された折り返し線は，パターンをさらに複雑なものとしている。また，これらのパターンには着用時のゆとりが全く考慮されていないため，着用者のサイズや動作に合わせて拡大する必要がある。

39　1878年５月11日号（p. 304）には，春夏の羽織物のイラストレーションが７点ほど紹介されており，そのなかにもウォルトのマントルが掲載されている。やはりフリンジ飾りが特徴的であるが，こちらのマントルのパターンは通販で販売された。

40　Edith Wharton, “The Age of Innocence,” *Wharton*, New York: The Library of America, 1985, pp. 1169.（邦訳は『無垢の時代』，佐藤宏子訳，荒地出版社，p. 146.）

41　“Personal,” 1877年12月29日号，p. 819.

42　“Personal,” 1881年２月19日号，p. 115.

43　『ハーパース・バザー』の記事からはウォルトよりもパンガがしばしば好まれたことがわかる。「羽織物をつくることにかけてはウォルトよりもパンガのほうが優れている」（“New York Fasihon,” 1875年４月17日，p. 251.），「パリのデザイナーであるパンガの趣味の良い衣装はウォルトのものよりも好まれている」などと記される。（“New York Fashion,” 1876年４月29日号，p. 275.）

44　1873年に掲載されたあるパターン業者の広告には「ファッションに関わることのすべてにおける権威 ── パリにとってのウォルトは，ニューヨークにとってのモシュコヴィッツである」とある。（1872年３月16日号，p. 199.）モシュコヴィッツとは，パターンのデザインを監督するドレスメーカーであり，その影響力はパリのオートクチュールのデザイナーに匹敵すると捉えられている。パリにおけるスタイルの創案に対し，アメリカではモデルの普及が求められた。

45　例えば次の記事を参照。“What I See on Fifth Avenue That I can Make Myself,” *The Ladies' Home Journal,* 1914年１月号，p. 24.

46　『ヴォーグ』は1899年から“Vogue Weekly Pattern”と題する特集を開始した。読者は特集ページにあるクーポンと50セントの送付でパターンを入手できた。またこの特集はのちに“Vogue Pattern Department”と変更されるが，1906年に“Vogue Coupon Pattern No. 399”として紹介されたのは，パキャンのコート（”Paquin Coat”）であった（*Vogue*, 1906年10月11日号，p. 492）。